



多賀城市の 生き物たち

ふるさとの自然について調べてみよう




多賀城市の生き物たち

多賀城に広がる環境


多賀城にはどのような環境が広がっているのか、見てみよう

それぞれの環境にいる生き物たち

それぞれの環境にどんな生き物たちがいるのか見てみよう



多賀城に
広がる環境



里山環境

- 林や草地、田んぼ・畑などからなる環境。
- 農林業などに伴う人の様々な活動によって作られ、保たれてきた環境。
- 今は生活の仕方の変化や都市化によって減ってきている。

- 多賀城市内では、
 - たがじょうあと 多賀城跡周辺
 - しびきいせき 志引遺跡周辺

- はいでらあと 廃寺跡周辺
- たがじょうちゅうとんち 多賀城駐屯地周辺

など



多賀城跡周辺



多賀城跡周辺



志引遺跡周辺



廃寺跡周辺

水田環境

- 田んぼを中心とした環境。
- 日本人の主食のコメの生産場であるとともに、様々な水生生物などの生息・生育の場。
- 水質浄化や地下水の^{かんよう}涵養、洪水や土砂崩れの防止など、様々な働きを持つ。

- 多賀城市内では、
➤^{なんぐう}南宮地区、^{さんのお}山王地区などの水田地帯

など



南宮神社付近



初夏（田植後）の水田



早春（田植前）の水田



冬（稲刈後）の水田

河川環境

- 川を中心に、川沿いの林や草地などからなる環境。
- 河口部などの海に近い場所は、淡水と海水が混じった汽水域となる。
- 魚や水生昆虫、水生植物などをはじめとした動植物の生息・生育の場。



河川環境の例

- 多賀城市内では、

➤ 砂押川

➤ 勿来川^{なこそ}

➤ 七北田川

➤ 貞山運河^{ていざん}

注：砂押川と勿来川は遊水地も含む

など



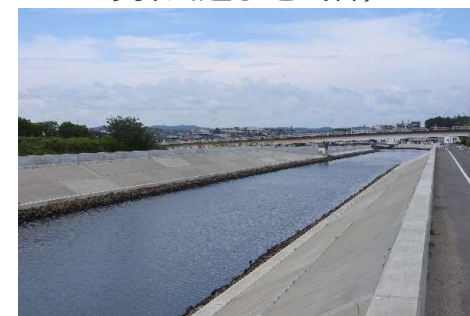
砂押川（市川橋付近）



砂押川遊水地（春）



砂押川遊水地（冬）



砂押貞山運河

池沼環境

- 湖や沼、ため池等の止水域を中心とした環境。
- 魚や水生昆虫、水生植物などをはじめとした動植物の生息・生育の場。



加瀬沼（西岸から）

- 多賀城市内では、
➤加瀬沼

など



加瀬沼（南岸から）

市街地環境

- 主に人々が生活する場。
 - 住宅やビル、道路、鉄道など、人工構造物が主体。
 - 庭や街路樹、公園などの緑地も点在。
- 多賀城市内では、
 - 主に砂押川の東側
- など



住宅街



公園




多賀城市図書館



緩衝緑地



それぞれの環境にいる
生き物たち



里山環境にすむ代表的ないきもの

ニホンリス

- 頭からお尻まで16～22cmぐらい、しっぽは13～17cmぐらいの大きさのリスの仲間。
- 森林、特にマツ林にすんでいて、木の上に木の枝や皮で巣をつくる。
- クルミやまつぼっくり、どんぐりなどを食べる。
- 食べ残し（食痕という）が特徴的。クルミはまつぶたつに割って食べるので、きれいに半分に割れた殻が残る。まつぼっくりは周りだけ食べるので、食べ残した芯がエビフライみたいにみえる。
- 冬眠はしない。このため、冬に備えて木の上や地面に食べ物をためておく習性がある。時々、取り出すのを忘れて、そこから芽が出ることも。



ニホンリスが食べたクルミとまつぼっくり

アカネズミ

- 頭からお尻まで8～14cmぐらい、しっぽは7～13cmぐらいの大きさのネズミの仲間。
- 森林、田んぼ、畑、川原などにすんでいて、地面に穴を掘って巣をつくる。
- クルミやドングリ、植物の種や根っこ、昆虫などを食べる。
- クルミは丸い穴をあけて食べるため、特徴的な食痕となる。
- 冬眠はしない。ニホンリスと同じように、食べ物を巣穴や岩陰等にためておく習性がある。



アカネズミが食べたクルミ

里山環境にすむ代表的ないきもの

ホトトギス

- ヒヨドリより大きく、ハトより小さいカッコウの仲間。
- 平地から山地の林にすんでいて、毛虫などを食べる。
- 春に日本にやってきて繁殖する夏鳥であるが、自分で子育てせず、主にウグイスの巣に卵を産み、子育てをさせる（托卵という）。
- 叫ぶように「キョッキョ キョッキョキョッキョ」と鳴き、「特許許可局」や「テッペンカケタカ」と聞きこえる。
- 万葉集では、ホトトギスを題材とした歌が153首（鳥で最多）ある。
卵の花の 咲き散る岡ゆ 霍公鳥 鳴きてさ渡る 君は聞きつや
作者不詳 万葉集 10巻 1976

意味：卵の花が 咲き散る岡から ホトトギスが
鳴いて飛び渡って行きましたよ あなたは聞きましたか

オオタカ

- カラスぐらいの大きさのタカの仲間。鷹狩りに良く用いられる。
- 巣を作る大きな木がある林と、狩りをする草地などの開けた環境がある場所にすんでいる。
- ハトぐらいまでの小鳥やネズミ等の小動物を食べる。
- 1年中いる留鳥で、大きな木に巣を作り、繁殖をする。
- 開発などにより個体数が激減したが、種の保存法などにより保護が進み、近年は個体数が回復している。
- 万葉集では、タカは矢形尾といわれ、これを題材とした歌が6首ある。
矢形尾の 真白の鷹を 宿に据ゑ 掻き撫で見つつ 飼はくしよしも
大伴家持 万葉集 19巻 4155

意味：矢形の尾をもつ 真っ白な鷹を 宿に置いて
羽をやさしくさすって見ながら 飼うことは素晴らしい



里山環境にすむ代表的ないきもの

アオバズク

- ハトぐらいの大きさのフクロウの仲間。
- 主に林や大きな木がある神社やお寺にすんでいる。
- 夏鳥で、大きな木の樹洞などに巣を作り、繁殖する。
- 夜に活動し、主に昆虫類を食べる。
- 「ホッホッ」と繰り返して鳴く。
- 樹洞のある木が減り、個体数が減ってきている。

ニホンカナヘビ

- 頭からしっぽまで16～27cmぐらいの大きさのトカゲの仲間。このうち2/3の11～20cmぐらいがしっぽ。
- 主に草地、やぶ、庭先、空き地などにすんでいる。
- 昆虫やクモを食べる。
- 敵につかまりそうになると、しっぽを自分で切り落とし、切れたしっぽが動いて敵の気をひいている間に逃げる。
- 冬には土の中などで冬眠する。

里山環境にすむ代表的ないきもの

アオダイショウ

- 頭からしっぽまで110～200cmのヘビの仲間。
- 森林から草地、田んぼや畑、民家などの様々な場所にすんでいる。
- 主にネズミ、鳥や鳥の卵、トカゲやカエルなどを食べる。
- 木や壁を登ったり、泳いだりすることもできる。
- 毒はないが、捕まえると臭いにおいをだす。
- 冬は土の中などで冬眠する。
- 全身が白くなった個体（アルビノという）もいて、神様の御遣いとされ、大事にされている。山口県岩国市周辺では白い個体が多く、国の天然記念物にも指定され、保護されている。



クロサンショウウオ

- 頭からしっぽまで12～18cmの比較的大型のサンショウウオの仲間。
- 森林にすんでいて、落ち葉や倒木、石の下などにいる。
- 主に昆虫やミミズなどを食べる。
- 雪解け後、林の近くの池や沼などで、20～80個の卵を収めたアケビの実のような形の卵のうを1対産む。
- 開発などによる生息地や産卵場所の減少やアメリカザリガニなどの外来種の影響により、個体数が減ってきている。



クロサンショウウオの卵のう

里山環境にすむ代表的ないきもの

オオムラサキ

- 羽を広げると10cm以上になる大型のチョウの仲間。かがや
- オスは羽の表が美しい紫色に輝くが、メスはこげ茶色。みつ
- クヌギやコナラなどの雑木林にすんでいる。
- 成虫は6～7月に見られ、クヌギやコナラの樹液やクリなどの花の蜜を吸う。
- エノキに卵を産み付け、卵からかえった幼虫はエノキの葉を食べて成長する。それ以外のものは食べないため、エノキがないと成長できない。
- 日本昆虫学会により、日本の国蝶に選ばれている。
- 万葉集では、チョウを題材とした歌はない。
- ただし、元号の令和のもとにもなっている5巻の梅花の歌32首の序文でチョウは登場する。

カブトムシ

- 角を除いて3～5cmの大きさの甲虫の仲間。
- オスには先が4つに分かれた大きな角と先が2つに分かれた小さな角がある。メスには角はない。
- クヌギやコナラなどの林にすみ、これらの樹液を吸う。
- 腐葉土（葉っぱが腐ってできた土）などに卵を産む。卵からかえった幼虫は3回脱皮した後、サナギになり、6～7月頃に成虫となって出てくる。成虫は9月頃まで見られる。



里山環境にすむ代表的ないきもの

カタクリ

- 高さ10～15cm程度の多年草で、ユリの仲間。
- 日光のよく入るブナやミズナラなどの落葉広葉樹林に生える。
- 4～6月頃に薄紫色の花を下向きに咲かせる。
- まだら模様が入った長楕円形の葉が1～2枚つく。
- 昔はこの球根からデンプンをとって片栗粉を作っていた。
- 群生地は市町村の天然記念物に指定されているものもある。
- 万葉集では、堅香子と言われ、これを題材とした歌が1首ある。
もののふの、八十娘子らが、汲み乱ふ、寺井の上の、堅香子の花
大伴家持 万葉集 19巻 4143
意味：沢山の少女たちが水を汲んでいるような姿で
寺井の上に咲いているカタクリの花のなんて可憐なことだろう

ハギの仲間

- 高さ1～2m程度の落葉低木で、マメの仲間。ヤマハギやミヤギノハギなどが代表的。
- 7～10月頃にピンクや白の花を咲かせる。
- 秋の七草のひとつ。
- 十五夜にススキやお団子と一緒に供えする習慣がある。
- ミヤギノハギは宮城の県の花。
- 万葉集では、ハギを題材とした歌が142首（植物で最多）ある。
高円の 野辺の秋萩 このころの あかとき露に 咲きにけむかも
大伴家持 万葉集 8巻 1605
意味：高円の 野に咲く秋萩は ここ数日の
明け方の露を受けて もう咲いているだろうか

里山環境にすむ代表的ないきもの

エノキ

- 高さ20m以上になる落葉高木。
- 4月頃、緑色の小さな花をたくさん咲かせるが、あまり目立たない。
- 9～10月頃にだいたい色の6～8mm程度の実をつける。甘く、食べられる。
- オオムラサキ、ゴマダラチョウなどのチョウの幼虫のエサとなる木。
- 江戸時代には一里塚（約4km毎の目印）として植えられた。
- 万葉集では、エノキを題材とした歌が1種ある。

わが門の 榎の実もり喫む 百千鳥 千鳥は来れど 来ぞ来まさぬ
作者不詳 万葉集 16巻 3872

意味：我が家の門の エノキの実をついばみに来る 多くの鳥たち
鳥はたくさん来ますが あなたは来てくれない。

ヤマザクラ

- 高さ15～25m程度の落葉高木。
- 日本で自生するサクラの代表種。自生地は宮城が北限。
- 3～4月頃にピンクや白の花を咲かせ、同時に赤みを帯びた若葉をつける（ソメイヨシノなどは花の後に葉をつける）。
- 現在の花見の中心であるソメイヨシノは、江戸後期に品種改良で作られて明治以降に全国に広がったもので、それ以前はもともと生えていたヤマザクラが花見の中心だった。
- 万葉集では、ヤマザクラを含むサクラを題材とした歌が約40首ある。

あしひきの 山桜花 日並べて かく咲きたらば いと恋ひめやも
山部宿禰赤人 万葉集 8巻 1425

意味：山桜の花がが これから何日も 今のように咲いているのなら
こんなにひどく心惹かれることはないだろうに

里山環境にすむ代表的ないきもの

ウラジロガシ

- 高さ20m以上になる常緑高木。葉の裏面が白い。
- 温暖湿潤な環境に生える。宮城県が北限で、主に沿岸部に生える。
- 5～6月頃、褐色の穂状の雄花と緑色の雌花を咲かせる。
- 堅く、建材や家具材などに用いられる。
- 万葉集では、ウラジロガシを含むカシを題材とした歌が3首ある。

あしひきの山路も知らず 白檀の枝もとををに 雪の降れば
柿本人麻呂 万葉集 10巻 2315

意味：どこが山道なのかも分からない
白檀の枝もたわわになるほどに 雪が降っているので。

エゴノキ

- 高さ10m程度の落葉高木。
- 日本全国の雑木林に生える。
- 5～6月頃、枝先いっぱい白い鈴のような花を咲かせる。
- 実は「えぐい」味がする。ここからエゴノキと名前が付けられた。ヤマガラが好む。
- 昔は若い実を石けんの代わりにしていた。
- 万葉集では、ちさと言われ、これを題材とした歌が3首ある。

山ぢさの白露重み うらぶれて 心も深く 我が恋やまず
柿本人麻呂 万葉集 11巻 2469

意味：山ぢさの花が 露の重みで うなだれるように 私の心も深く
うなだれている あなたへの恋心は止むときがないので

水田環境にすむ代表的ないきもの

サギの仲間

- 長い首と脚、くちばしをもつ水鳥の仲間。体が白いダイサギ、チュウサギ、コサギなどは白鷺（シラサギ）と呼ばれる。
- 水田や川などにすみ、魚や両生類、爬虫類などを食べる。
- 河川敷や神社・お寺などの、見晴らしの良い高い木の上に集団で巣を作る。
- ダイサギとコサギは留鳥、チュウサギは夏鳥。

- 万葉集では、サギを題材とした歌が1首ある。

池神の 力士舞かも 白鷺の 杵啄ひ持ちて 飛び渡るらむ
長忌寸意吉麻呂 万葉集 16巻 3831

意味：池神社の 力士舞のように見えますね
白鷺が 枝を銚のように口にくわえて 飛んでいくのは



ヒバリ

- スズメよりやや大きいヒバリの仲間の代表種。
- 農耕地や草地、河川敷などにすんでいる。
- 主に植物の種を食べるが、昆虫やクモも食べる。
- 春になると鳴きながら高く飛び上がり、自分のなわばりを主張する。
- 1年中いる留鳥。ただし、雪の多いところにすむものは、冬は雪の少ないところへ移動する。

- 万葉集では、ヒバリを題材とした歌が3首ある。

ひばり上がる 春へとさやに なりぬれば 都も見えず 霞たなびく
大伴家持 万葉集 20巻 4434

意味：ヒバリが空に上がる 春に確かに なりましたね
都が見えないほど 霞がたなびいています



水田環境にすむ代表的ないきもの

ニホンアマガエル

- 2～4.5cm程度の小形のカエルの仲間。
 - 比較的乾燥に強く、水田の他、森林、草地などにもすむ。指に吸盤きゅうばんがあり、木や壁などを登ることができる。
 - 小さな昆虫類やクモなどを食べる。
 - 春に水田や池などで卵を産む。
 - 皮膚の粘膜に弱い毒を持つ。
 - 雨の日や雨が降る直前によく鳴く。
 - 周りの色によって、皮膚の色を変える。
- 万葉集では、カエルを題材とした歌が20首あるが、ニホンアマガエルではなく、溪流にすみ、鳴き声がきれいなカジカガエルを題材としている。



ケラ

- 3cm程度のコオロギの仲間。
- 水田や畑、草原などにすみ、巣穴を掘って地中で生活する。
- 植物の根や種子、小さな昆虫類やミミズなど、様々なものを食べる。
- 地中を掘り進み、水上を泳ぎ、空を飛び、地上を歩くと、様々な環境に対応しているオールマイティーな生き物である。
- 初夏に「ジー」とも「ビー」とも聞こえる声でよく鳴く。
- 「手のひらを太陽に」で出てくるように「オケラ」とも呼ばれる。

水田環境にすむ代表的ないきもの

ヘイケボタル

- 1cm程度のホタルの仲間。ゲンジボタルより小さい。
- 水田、湿原などにすんでいて、成虫は主に7～8月頃に見られる。
- 1秒間隔ほどでチカッと短く光る。ゲンジボタルは2～4秒間隔で光る。
- ヘイケボタルは胸の黒い模様が線状で、ゲンジボタルは十字模様。
- 幼虫は水中にすみ、モノアラガイなどの貝類を食べる。
- 成虫だけではなく、卵も幼虫もサナギも光る。
- 水田環境の変化や農薬の影響により、生息環境が減ってきている。
- 万葉集では、ホタルを題材とした歌（長歌）が1種ある。
 - … 玉梓の 使の言へば 螢なす ほのかに聞きて …
 - 作者不詳 万葉集 13巻 3344
- 意味：… 使者からの知らせを 螢のように ぼんやりと聞いて …

セリ

- 高さ30cm程度の多年草でセリの仲間の代表種。
- 湿地性の植物で、水田や川べりなどに生える。
- 7～8月頃に白い小さな花を塊で咲かせる。
- 春の七草のひとつ。
- 七草がゆやセリ鍋として食べられる。
- 万葉集では、セリを題材とした歌が2首ある。
 - 大夫と 思へるものを 大刀佩きて かにはの田居に 芹ぞ摘みける
 - 薛妙観命婦 万葉集 20巻 4456
- 意味：ご立派な男子と お見受けしましたが 大刀を佩かれたまま かにはの田で 芹を摘んでおられたのですね

河川環境にすむ代表的ないきもの

イタチ

- 頭からお尻まで20～37cmぐらい、しっぽは8～16cmぐらいの大きさのイタチの仲間の代表種。
- オスがメスよりかなり大きい。
- 主に川沿いの水辺などに生息し、泳ぎがうまい。
- ネズミ、小鳥の卵やヒナ、昆虫類、カエル、ザリガニや魚などを食べる。
- 身の危険を感じると、お尻の辺りから非常に臭い黄色い液体を出す。いわゆる「イタチの最後っ屁」。



コチドリ

- スズメぐらいの大きさのシギ・チドリの仲間。
- 河川、埋立地、造成地、水田等にすんでいる。
- 昆虫、ミズなどを食べる。千鳥足と呼ばれるジグザグとした移動と静止を織り交ぜて素早く獲物に近づき、捕まえる。
- 「ピィ」、「ピィピョ」、「ビュービュー」と鳴く。
- 春に日本にやってきて、秋には南へ渡っていく夏鳥。

- 万葉集では、コチドリを含むシギ・チドリを題材とした歌が26首ある。
佐保川の 清き川原に 鳴く千鳥 かはづと二つ 忘れかねつも
作者不詳 万葉集 7巻 1123

意味：佐保川の 清らかな河原に 鳴く千鳥は
カジカの声と共に 忘れられないことよ



河川環境にすむ代表的ないきもの

オオヨシキリ

- スズメより大きいヨシキリの仲間。
- 河川や池沼などのヨシ原などにすんでいる。
- 昆虫、節足動物などを食べる。ヨシを切り裂いて中にある獲物を食べるとされ、名前の由来とされる。
- 「ギョギョシ ギョギョシ」と叫ぶように大きな声で鳴く。
- カッコウに托卵される。

ニホンウナギ

- 全長100cm程度のウナギの仲間。
- 主に河川の中・下流域や河口域、湖にすんでいる。
- 海で卵を産み、卵からふ化した稚魚は汽水域から淡水の河川で大きくなる。5～12年程度たった後、海へ移動して卵を産む。
- 主に水生昆虫、小さな魚、貝、エビなどを食べる。
- 数が少なくなってきていて、絶滅の危険性が高くなっている。

- 万葉集では、ニホンウナギを題材とした歌が2首ある。

石麻呂に 我れ物申す 夏瘦せによしといふものぞ 鰻^{うなぎ}捕り食せ
大伴家持 万葉集 16巻 3853

意味：石麻呂さんに申し上げます
夏瘦せに 効くそうですから 鰻^{うなぎ}を捕って食べてください



河川環境にすむ代表的ないきもの

アユ

- 全長30cm程度のキュウリウオという魚の仲間。
- 秋に川の下流でふ化した稚魚は海や河口で大きくなる。翌春に川をのぼって中流でさらに大きくなったあと、秋に下流へ移動して卵を産む。
- 稚魚はプランクトンや小さな水生昆虫などを、大きくなった後は石につく藻や水生昆虫などを食べる。
- おとり鮎を使う友釣り、ウを使って獲る鵜飼など、様々な方法で獲られる。

- 万葉集では、アユを題材とした歌が16首ある。

鵜川立ち 取らさむ鮎のしがはたは 我れにかき向け 思ひし思はば
おおとちのやからち 万葉集 19巻 4191

意味：鵜飼をして 捕った鮎の ひれを 送ってくれないか
忘れずに友達だと思っていてくれるなら



ババアメンボ

- 6～9mm程度の小形のアメンボの仲間。
- 抽水植物が多い池沼に生息する。
- 6本の脚のうち、中脚と後脚が非常に長い。
- 脚先に短い毛がたくさん生えていて、この毛だけを水面につけて、毛が水をはじく表面張力を利用して水面に浮かぶ。
- 水面を滑って移動し、水面に落ちた小さな昆虫を捕まえて、体液を吸う。
- 開発などによる生息地の減少が、ババアメンボの生息に影響を与えるおそれがある。



河川環境にすむ代表的ないきもの

ミクリ

- 高さ50～100cm程度、最大2m程度になる多年生の抽水植物の仲間。
- 河川や池沼などに生える。
- 6～9月に、とげのある丸い花を咲かせる。
- 実が栗のイガに似ているため、実栗（ミクリ）という名前が付けられた。
- 地下茎を伸ばして、そこから新しい株を出し、増えていく。
- 河川や池沼などの開発や改修により、数が減ってきている。



タコノアシ

- 高さ30～80cm程度の多年草。
- 河川敷、湿地や沼などの湿った場所で、攪乱かくらんが多く、水位変動がある場所に生える。
- 8～10月に、5mm程度の小さな白い花を咲かせる。
- 花がタコの足の吸盤のように見え、さらに秋になると実が熟して赤くなり、ゆでダコのように見える。このため、タコノアシという名前が付けられた。
- 河川や湿地などの開発や改修により、数が減ってきている。



池沼環境にすむ代表的ないきもの

オシドリ

- 45cm程度の大きさのカモの仲間。
 - 池沼や河川などにすみ、水生植物、果実、種子、昆虫などを食べる。
 - 1年中いる留鳥で、大きな木の樹洞に巣を作り、繁殖をする。
 - 仲の良い夫婦をオシドリ夫婦と呼ぶが、実際のオシドリは毎年パートナーを変える。
- 万葉集では、オシドリを題材とした歌が4首ある。

鴛鴦あしどりの住む 君がこの山しん斎 今日見れば
馬酔木あしべの花も 咲きにけるかも

三形王 万葉集 20巻 4511

意味：オシドリが住んでいる あなたのお庭を 今日見てみれば
アセビの花が 咲いていますね

カルガモ

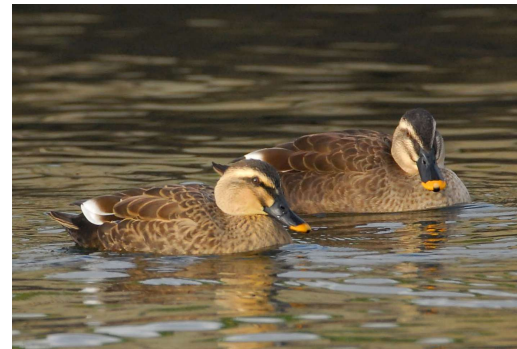
- 60cm程度の大きさのカモの仲間。
- 池沼や河川、水田などにすみ、植物の葉や種子などを食べる。
- 1年中いる留鳥で、水辺の草むらや藪やぶに巣を作り、繁殖をする。
- ヒナを一行に連れて歩く引っ越しがよく話題となる。
- カモは冬羽の色がオスとメスで異なり、オスの方が派手であるが、カルガモは冬もオスメス同色。

- 万葉集では、カルガモを含むカモを題材とした歌が29首ある。

葦あし辺行く 鴨がの羽交はひに 霜降りて 寒き夕は 大和やまとし思ほゆ

志貴皇子 万葉集 1巻 64

意味：葦あしの生えた水辺の 鴨がの羽に 霜が降りているが
こんな寒い夕暮れには 大和のことが思われます



池沼環境にすむ代表的ないきもの

カイツブリ

- 26cm程度の大きさのカイツブリの仲間の代表種。
- 池沼や河川などにすみ、潜って魚、甲殻類、貝などを獲って食べる。
- 1年中いる留鳥で、水面に巣を作り、繁殖をする。
- 主に水上で生活し、潜水がうまい。
- ほとんど歩くことはない。足は歩くためではなく、泳ぐときのオール役割のためにあるとみられ、お尻付近から出ている。

- 万葉集では、にほ鳥と言われ、これを題材とした歌が8首ある。

思ひにしあまりにしかばにほ鳥のなづさひ来しを人見けむかも

作者不詳 万葉集 11巻 2492

意味：恋しさに思いあまってカイツブリのように

足元を濡らしてやってきたのを人に見られたらどうか



コイ

- 全長60cm程度（まれに100cmを超える）の大きさのコイの仲間の代表種。
- 大きな川の中下流域から汽水域、湖沼にすんでいる。流れが緩やかで、底が砂や泥になっている場所の底の方にいることが多い。
- 主に貝、イトミミズ、水草などを食べる。
- 餌は砂泥ごと吸い込み、砂泥だけをはき出して食べる。
- コイを観賞用にカラフルできれいに品種改良したものがニシキゴイ。



池沼環境にすむ代表的ないきもの

チョウトンボ

- 3～4cm程度のトンボの仲間。
- 水生植物の多い池沼や河川敷などにすんでいる。
- 金属光沢の強い青紫色の翅を持つ。
- チョウのようにヒラヒラと飛ぶので、チョウトンボという名前が付けられた。
- 成虫は6～9月頃に見られる。
- 万葉集では、あきつと言われ、これを題材とした歌が2首ある。
あきつ羽の 袖振る妹を 玉櫛笥 奥に思ふを 見たまへ我が君
湯原王 万葉集 3巻 376
意味：トンボの羽のように透き通った 衣の袖を振って舞うあの人を
大事に思っています ご覧くださいわが君よ

ヒシ

- 一年草の浮葉植物の仲間。
- ため池、沼、湖などの止水域に生える。
- 7～10月頃に1cm程度の白い小さな花を咲かせる。
- 実には2本の鋭いとげがある。ヒシの仲間のオニビシの実には4本のとげがあり、忍者が「まきびし」として使っていた。
- 万葉集では、ヒシを題材とした歌が2首ある。
君がため 浮沼の池の 菱摘むと 我が染めし袖 濡れにけるかも
柿本人麻呂 万葉集 7巻 1249
意味：あなたのために 浮沼の池の 菱の実を採ろうとして
着物の袖を 濡らしてしまいました



市街地環境にすむ代表的ないきもの

ツバメ

- スズメより大きいツバメの仲間の代表種。
- 市街地、農耕地などにすみ、飛翔する昆虫などを食べる。
- 夏鳥で、民家や駅などの人がいる場所に巣を作り、繁殖をする。
- 繁殖が終わると、河川敷やため池などのヨシ原に集まり、数千～数万羽の集団ねぐらを形成する。
- 天気のことわざとして、ツバメが低く飛ぶと雨が降る、と言われる。
- 万葉集では、ツバメを題材とした歌が1首ある。
つばめ来る 時になりぬと かりがねは 本郷思ひつつ 雲隠り鳴く
大伴家持 万葉集 19巻 4144

意味：ツバメが来る 時期になったと 雁は
故郷を思って 雲の上で鳴いています

イソヒヨドリ

- ヒヨドリより少し小さいヒタキの仲間。
- 海岸周辺に主にすんでいたが、近年は市街地にもすむようになった。
- 甲殻類や昆虫、トカゲなどの様々な小動物を食べる。
- 留鳥で、海岸では岩のすき間など、市街地ではビルの屋上や屋根のすき間、通風口などに巣を作り、繁殖をする。
- 繁殖中や天気の良い日に大きく、澄んだきれいな声で鳴く。
- オスとメスで体色が異なり、オスは頭と背中が青色、お腹がオレンジ、羽根が黒とカラフル。メスは全身が茶褐色でうろこ模様がある。

市街地環境にすむ代表的ないきもの

ベニシジミ

- オレンジ色が目立つ1～2cm程度の小さなチョウの仲間。
- 草原や畑などの明るい開けた環境にすんでいて、人家周辺でも最も普通に見られる。
- 成虫は春から秋にかけて見られるが、特に4～6月に多く見られ、タンポポ、ヒメジョオン、シロツメクサなどの色々な花の蜜を吸う。
- 幼虫はスイバ、ギシギシなどタデの仲間の植物を食べる。
- 万葉集では、チョウを題材とした歌はない。
- ただし、元号の令和のもとにもなっている5巻の梅花の歌32首の序文でチョウは登場する。

キアゲハ

- 4～6cm程度の大型のチョウの仲間。
- 平地から山地の草原や畑などの明るい開けた環境にすんでいる。
- 成虫は春から秋にかけて見られ、ツツジの仲間やアザミの仲間の花の蜜を吸う。
- 幼虫はセリの仲間の植物を食べるほか、ニンジン、パセリなどの野菜も食べる。このため畑や家庭菜園などでも見られる。

特定外来生物

特定外来生物とは？

- 外来生物法に基づき指定され、取り扱いの制限、防除の対象となるもの。
- 外来生物であって、生態系、人の生命・身体、農林水産業へ被害を及ぼすもの、又は及ぼすおそれがあるものの中から指定。
- 生きているものに限られ、個体だけではなく、卵、種子、器官なども含まれる。

特定外来生物が規制されることは？

- 飼育、栽培、保管及び運搬の原則禁止。
- 輸入の原則禁止。
- 野外へ放つ、植える及びまくことの原則禁止。
- 飼育などが許可されていない者への譲渡、引渡し、販売の禁止。

ウシガエル

- 11～18cm程度の北アメリカ原産のカエル。
- 水草の繁茂する流れの緩やかな河川、池沼、湿地などにすんでいる。
- 昆虫類、甲殻類、魚類、両生類、小型爬虫類、鳥類、小型哺乳類、果ては自分より小さい同じウシガエルに至るまで、口に入るあらゆる動物を食べる。
- 「ブオー、ブオー」というウシに似た声で鳴く。このため、ウシガエルという名前が付けられた。
- ウシガエルの養殖用のエサとして、アメリカザリガニが輸入された。
- 日本には1918年に食用として輸入された後、各地に広がった。
- 食べたりすみかを奪ったりすることで、在来のカエルをはじめとした多くの小動物に影響を与えられ、2005年に特定外来生物に指定された。

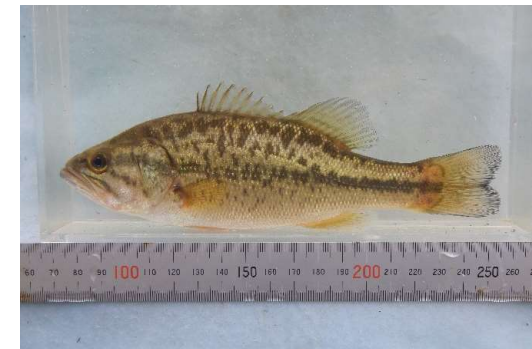
特定外来生物

ブルーギル

- 全長20cm程度の北アメリカ原産の魚。
- 池沼や流れのごく緩やかな河川などにすんでいる。
- 水生昆虫、甲殻類、貝、小魚、魚卵、ミズなど様々な小動物を食べる。餌がないときは水草も食べる。
- 春～夏に繁殖する。オスが卵、稚魚を守る習性がある。
- 日本には、1960年に当時の皇太子明仁親王がシカゴ市長より寄贈されて持ち帰った15匹が、1966年に水産庁により放流され、各地に広がった。
- 食べたりすみかを奪ったりすることで、多くの在来の魚類や水生植物などに影響を与えられ、2005年に特定外来生物に指定された。

オオクチバス

- 全長30～50cm程度の北アメリカ原産の魚。
- 池沼や流れの緩やかな河川のほか、汽水域などにすんでいる。
- 水生昆虫、魚類、甲殻類、節足動物、カエル、ネズミ、小鳥など様々な小動物を食べる。
- 5～7月に繁殖する。オスが卵、稚魚を守る習性がある。
- 日本には、1925年に芦ノ湖に放流され、各地に広がった。
- 食べたりすみかを奪ったりすることで、在来の魚類をはじめとした多くの小動物に影響を与えられ、2005年に特定外来生物に指定された。



特定外来生物

コクチバス

- 全長30～50cm程度の北アメリカ原産の魚。
- 湖沼や河川の中下流域などにすんでいる。
- 魚類、水生の節足動物、昆虫など様々な小動物を食べる。
- 5～7月に繁殖する。オスが卵、稚魚を守る習性がある。
- 日本には、1925年にオオクチバスとともに芦ノ湖に放流されたが、定着はしなかった。その後、1990年頃に再び放流され、定着したと考えられる。
- オオクチバスよりも低水温を好み、流れの早い河川でも生息できるため、オオクチバスが侵入できないような渓流域や流水域にも侵入し、在来生物へ影響を与えることがおそれられている。
- 食べたりすみかを奪ったりすることで、在来の魚類をはじめとした多くの小動物に影響を与えられ、2005年に特定外来生物に指定された。



アレチウリ

- 北アメリカ原産のウリの仲間で、一年生のツル植物。
- 河川敷、荒地、道ばたなどに生える。
- 8～9月頃に淡い緑色の雌花と薄い黄色の雄花を咲かせる。
- 実にはするどいトゲがたくさんあり、触ると痛い。
- 繁殖力が非常に強く、1株当たり25,000個以上の種子をつけていた例もある。
- 日本には1952年に輸入大豆に種子が混入して入ってきたのが最初とされる。千曲川では1970年に侵入が確認された。
- すみかを奪うことで、河川敷などの在来種、畑の作物、イネなどに影響を与えられ、2006年に特定外来生物に指定された。



特定外来生物

オオカワヂシャ

- ヨーロッパからアジア北部原産のオオバコの間で、高さ30～100cm程度の多年草。
- 川原、河川や湖沼の岸边、水田などに生える。
- 4～9月に淡い紫色の花をたくさん咲かせる。
- 種子で増えるほか、根茎からも増える。
- 日本には1867年に神奈川県で初めて確認されたが、詳しい侵入経路や時期は不明。
- すみかを奪ったり、雑種を作ったりすることで、在来種のカワヂシャに影響を与えると考えられ、2006年に特定外来生物に指定された。



オオキンケイギク

- 北アメリカ原産のキクの間で、高さ30～70cm程度の多年草。
- 河川敷、土手、道ばたなどに生える。
- 5～7月に黄色の花を咲かせる。
- 繁殖力が非常に強く、1平方メートルあたり3,000～5,000粒の種子を生産すると言われている。
- 日本には1880年代に鑑賞目的で導入され、緑化にも利用された。
- すみかを奪うことで、在来の草本植物に影響を与えられ、2006年に特定外来生物に指定された。

